

京極読書新聞 <第20号>

発行日 平成23年 2月 1日(火)
京極町生涯学習センター湧学館

<『平家』を読む会>の二年間

平家物語読書会 講師 村山 功一(むらやま・こういち)

湧学館文学講座の一つとして、古典『平家物語』を読む会を開講して二年が終わろうとしています。

当初、単年度完了の“素読(本文を朗読するだけ)”を予定していましたが、継続講座の形に切替え、全十二巻プラス「灌頂巻」に至る全巻の“講読(口語訳や時代背景などの解説を含む)”を目標に進めています。今年度は新メンバー2名を加え、現在9名で活動しております。目下「巻三」の後半を読んでいます。年度内に「巻三」を終え、新年度は「巻四」から始める予定です。

『平家物語』には、特定の主人公といわれる人物はおりません。ただし、ごく大雑把に言えば、前半は平清盛が、中間では木曾義仲が、そして後半は源義経が、物語の中心人物と言えるでしょう。

また、『平家物語』を貫く“因果応報”という観点から平家一門の運命に焦点を当てると、「巻一」から「巻六」までが一門滅亡に至る<因>を描き、「巻七」以降が<果>という構成になるかと思えます。

私たちがこの二年間で読み進めてきた各章段は、動きのないやや煩わしい部分でしたが、物語はいよいよ動乱の時代に入り、英雄・豪傑が“目白押し”という『平家』の一方の本領ともいべき「いくさ語り」を堪能できる展開になります。「請う、ご期待！」です。

ともあれ、二年間続けられたことを喜ぶとともに、いつも支え励ましてくれるメンバーの皆様、そして湧学館の関係各位に感謝申し上げます。まとめいたします。



京極読書新聞第21号は
3月1日(火)発行予定です。

<<平家物語読書会 活動状況>>

平成22年

- ① 4/ 2: 巻二「少将乞請」「教訓状(1)」
- ② 4/16: 「教訓状(2)」「烽火之沙汰」
- ③ 5/ 7: 「大納言流罪」「阿古屋之松」
- ④ 5/21: 「大納言死去」
- ⑤ 6/ 4: 「徳大寺之沙汰」「山門滅亡堂衆合戦」
- ⑥ 6/18: 「山門滅亡」
- ⑦ 7/ 2: 「善光寺炎上」「康頼祝言」
- ⑧ 7/16: 「卒塔婆流」
- ⑨ 8/ 6: 「蘇武」
- ⑩ 8/10: 巻三「赦文」
- ⑪ 9/ 3: **特別講座 映像とトークによる**
「平家物語の史跡を訪ねて(2)東山編」
リポーター 黒滝千織(京都在住)
- ⑫ 9/ 7: 「足摺」
- ⑬ 10/ 1: 「御産」
- ⑭ 10/15: 「公卿揃」「大塔建立」
- ⑮ 11/ 5: **平家琵琶「横笛」鑑賞**
- ⑯ 11/19: 「頼豪」
- ⑰ 12/ 3: 「少将都帰」
- ⑱ 12/17: 「有王」



平成23年

- ⑲ 1/ 7: 「僧都死去」
- ⑳ 1/21: 「颯」「医師問答」

◆今後の予定

- ・2/ 4 } 「無文」「燈炉之沙汰」
- ・2/18 } 「金渡」「法印問答」
- ・3/ 4 } 「大臣流罪」「行隆之沙汰」
- ・3/18 } 「法皇被流」「城南離宮」
- ・3/5、19 湧学館主催製本教室参加

◆その他

平成22年10月16日(後志文学散歩車中にて)
特別講義「義経伝説と北海道」

京極から文学散歩 第8回(最終回) 小林多喜二、東倶知安村へ

湧学館司書 新谷 保人 (あらや・やすひと)

小林多喜二。一昨年、「派遣切り」や「内定取消」といった不況の嵐が日本中を吹き荒れた頃、その世相に激しく反応したかのごとく昭和の時代から急浮上してきた小説、あの「蟹工船」を書いた人です。彼は小樽の町で少年期～青年期をすごしました。作家としての将来を囑望されていましたが、昭和8年2月、特高警察に捕まり、拷問の末、30歳という若さで死亡。

そして、東倶知安村というのは、現在の京極町のことです。今から百年前の明治43年4月、倶知安村より「東倶知安村」として独立しました。小林多喜二が、その東倶知安村を訪れたのは昭和3年2月のことです。第一回普通選挙。日本共産党から立候補した山本懸蔵の応援遊説隊として東倶知安村に小樽からはるばるやってきました。多喜二の「東倶知安行(ひがしくっちゃんこう)」という小説には、当時の京極の町や人々の光景がくっきりと描き出されています。例えば、

会場へ行くと、まだ始まらないのに、もう八分の入りだった。お寺の住職が「こんなに入った演説会は殆んどありませんよ。——貴方々(あなたがた)の方のは、何か毛色の変ったもんなんですか。」と云った。

この「お寺」とは、現在も京極町に残っている「光寿寺」です。

客車は北海道の支線によくあるマッチ箱のような小さい、入口が両側に幾つも取付けてある型で、真中に円い西瓜のようなストーブつきりだった。それに電燈が煤けたように薄暗く、時々消えそうになったりした。向かいあっている人とても、耳の後に掌をかざさないと聞えない程、汽車がガタガタ音がし、思わず身体をすくめる程揺れることがあった。

「東倶知安行」の、もうひとつ凄いところ。それが、ここです。なんと、当時、倶知安—京極(脇方)間を走っていた鉄道「京極軽便線」が描かれているのです！ 後に倶知安—伊達間を一直線につなぐことになる国鉄「胆振線」。その発端である「京極線」を見逃さず書いているあたりに、小林多喜二の作家としての勘の鋭さを感じます。「戦争」の臭いを多喜二もまた感じていたのでしょうか。

なぜ、京極駅が終点だったはずの鉄道が、遠く太平洋側の伊達紋別駅まで延びてゆかなければならなかったのか。それは、脇方の鉱山から出た鉄鉱石を、一刻でも早く鉄の町・室蘭に運びたかったからです。戦争には鉄が必要なのです。「胆振縦貫鉄道」として全通するのが昭和16年10月。太平洋戦争中にもかかわらず国有化するのが昭和19年7月です。

国有化したとたんに、壮瞥町にあった丘陵がどんどん隆起し始めます。やがてそれは現在の昭和新山となるのですが、それでも国は「胆振線」をあきらめません。隆起の度に、何度も何度も線路を掛け替え、コースを変えてでも維持し続けようとします。鉄が必要だったのです。「胆振線」は、その誕生から波乱含みの、ある意味、北海道が歩んだ歴史の縮図のような鉄道ではあります。



▲ 京極町脇方に残る胆振線鉄橋跡

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

